

ものづくり教育の実践的研究 (IV) —木の遊び道具づくりワークショップ展開の視点から—

渋谷 寿・小口 志磨

A Study of Education in Craft Activities (IV) —From the Viewpoint of the Development of a Wooden Toy Making Workshop—

Hisashi SHIBUYA and Shima OGUCHI

緒言

筆者らは、ヒノキ材を使用した遊び道具づくりワークショップの、より望ましいあり方を検討しながら実践を続けている。前報¹⁾において、ワークショップという学びと創造の場について検討した結果、設定されるワークショップの条件がそれぞれ独特で異なっており、それに伴って展開も異なる、その違いこそワークショップという学びと創造の形態の特色であることを確認した。その上で、筆者らの活動では、魅力的なテーマを設定し方向を示すことと、できる限り自由度のある創造的展開の可能な実践を目指すことを明らかにした。昨年度実践した、走る虫をつくるワークショップ(日本おもちゃ会議主催)は、子どもが興味を持つテーマとして方向を示すとともに、つくった虫を発射する発射装置は教材化し、走行する虫は、子どもの自由な発想を活かしてつくる創造的展開が可能な設定を行ったものである。このように、教材化した部分と自由な創造可能な部分を分けることにより、短時間で完結するワークショップの一つの望ましい展開を可能にしたと考えている。そこで、2002年度に実施した「山梨大学幼児野外教育研究会主催の野外教育におけるキャンプクラフト」、「名古屋女子大学オープンカレッジ夏休み工作教室」、「文化フォーラム春日井でのワークショップ」という3種類、合計5回のものでつくり活動は、2001年度に実施した「走る虫づくり」²⁾を基にして、部分的に改善したり、テーマを変化させる形で実践を行った。本論では、近年の美術館におけるワークショップの動向や、筆者らが実践したそれぞれのコンセプトの異なるワークショップの実践内容、問題点に焦点を当てて考察する。

最近のワークショップの動向

最近、美術館等の施設でワークショップが盛んに実践されるようになってきた。朝日新聞³⁾によると、国は、学校週5日制対策として、98年度、私立博物館や美術館を運営する法人を、税の優遇措置のある特定公益増進法人の対象に加えることにより側面支援をすることを目的としたという。文部(科学)省図画工作科学習指導要領にも、地域の美術館を使用するようという付帯事項⁴⁾が記載されているように、学校外での美術教育が推奨される動きがあり、最近では美術館の敷居を低くし、子ども向けのワークショップを館内で行ったり、親子で利用できる工夫をする館が増加してきている。例えば、同新聞によると、埼玉県立近代美術館主催の小

中学生対象の「アートの森」は、毎週土曜日に開かれている、国内では数少ない通年の子ども向けワークショップである。開催中の企画展と関連づけた実践を試みている例として、写真が立体的にみえる眼鏡づくりが紹介されている。同館山田主査の話として「うるさいという苦情もあるが、ワークショップは大人になっても美術を楽しめる人間を育てる先行投資。しつけや思いやりを学ぶ場にもなる。こうした趣旨を説明し、理解していただいている。」と、静かに作品を鑑賞するという一般的な美術館で、子どもを対象としたワークショップの試みを行っている。「親子でびじゅつかん」⁵⁾ホームページから、2002年夏休みに行われた、子どもが参加できるワークショップを一部拾い出してみると、次のような多彩な内容がある。

1) 神奈川県民ホールギャラリー、キッズ・ワークショップ「デジタルワールド・ミュージック」、各自で自分の好きな音のでるもの(楽器・音具・玩具・なんでもOK)を持参し、WS後半にみんなでジャムセッションをします。講師は春日聡(アーティスト)。対象:およそ4歳から小学生まで。2) 箱根彫刻の森美術館、自然の石や木などを使って、イメージを膨らませながら自由に「見立てた作品」(石ころアート)をつくります。対象:どなたでも。小さなお子様は保護者同伴。3) 町田市立国際版画美術館、簡単にできる版画を体験。入替え制で、実際の製作時間は20-30分程度。対象:小学生。4) 青梅市立美術館、夏休み子ども美術教室、版画(簡易式リトグラフ)虫、魚、鳥、花などの絵を描き、それを簡単なリトグラフの方法で版画にします。講師 木嶋ちさ加氏(版画家)、対象:青梅市内の小学生。5) 安曇野ちひろ美術館、「アートスクール in 安曇野」—あなたの感じる安曇野をかたちに—、内容:安曇野ちひろ美術館で行われる企画展「木・遊・人・島添昭義展」(7/19~9/24)の作家、島添昭義氏を講師に迎え、松川村を散策して収集した自然の素材を用いて作品を作ります。対象:どなたでも参加可。

また、兵庫県西宮市の市大谷記念美術館では、小さい子どものいる見学者のために一時保育を行い、家に閉じこもりがちで、乳児や幼児のいる主婦が展覧会を楽しめる工夫を行っている。首都圏を中心にした小さな子どものいる親を対象としたアンケートでは、69%が「子どもと美術館に行きたい」と思っているが、迷惑をかけそうだという理由等で「行ったことがない」人は54%に上っているというデータが記載されている。

このように、最近の傾向として、美術館において子ども向けや親子向けプログラムが増えていくことと、親子で参加できる工夫を行うという2つの方向での試みが志向されていると言えるであろう。筆者らは、2002年度には、毎年行っている、キャンプクラフトと夏休み工作教室の他に、小学校低学年の子ども達は親同伴という、「文化フォーラム春日井での、木のおもちゃづくりワークショップ」を行った。この文化フォーラム春日井での試みは、開催する企画展(木のおもちゃの魅力展—作家の思いそして夢—)とワークショップの内容が関連し、更に、親子での来場を想定した、最近の美術館でのワークショップの志向と同様の実践と言える。主催者集計による実際の会期中のアンケートに回答した入場者は、10才未満・39名、10代・37名、20代・34名、30代・194名、40代・46名、50代・19名、60代・21名、70代以上・3名、性別では男・99名、女・308名であり、年齢では30代が、性別では男性より女性がはるかに多かったことから、30代の母親と子どもという親子での来館が最も多く、最近の美術館へのニーズの傾向と同様の状況を示していると言えよう。

2002年度のワークショップ実践

2002年度は、3種類のワークショップの実践上の留意点を明確にする為に、2001年度に実践した「走る虫づくり」を一部改善した内容のワークショップと、それを応用した、キャンプクラフトテーマとして「パチンコ弓矢」づくりを計画した。ゴムチューブを使用した発射装置づくりは3種類のワークショップに共通している作業である。また、昨年度の実践から改善した内容は、走行する虫の車輪用の車軸の強度を上げる為に、車軸の丸棒を直径4 mmから直径6 mmにしたことと、発射装置の丸棒の前後に装着するブロックと丸棒の接続強度を上げる為に、丸棒と各ブロックの差し込み穴の深さを前回より、5 mmほど深くしたことである。これらの改善により、虫が走行して物にぶつかり、衝撃で車軸が折れる問題や、発射装置の丸棒と、先端部やゴムを掛ける後部ブロックが、虫を発射する時に同時に接着部がはずれて飛んでしまう問題を改善しようと考えた。

1. 山梨大学幼児野外教育研究会主催の野外教育におけるキャンプクラフト

パチンコ弓矢、「幼児・OB（小学生）キャンプ」、平成14年7月25日・7月30日の2回、山梨県本栖湖青少年スポーツセンター

(1) 活動の意義と概要

山梨大学幼児野外教育研究会主催の野外教育では、夏に幼稚園年長児と、小学生低中学年を対象としたキャンプを企画しており、毎回異なる総合的なテーマを設定している。2002年度のテーマは「初めてばんざい」であり、キャンプカウンセラーに配布されたキャンププログラムには、各カウンセラーがどのようなキャンプにしたいかを明確にするうえで、次のような記載がされている。「子どもたちは日々ものすごいスピードで成長しています。そして、その成長にははじめての「ひと」、「もの」、「こと」との出会いがとても大切です。今回のキャンプでも、子どもたちにとってはじめての体験がたくさんあります。そんな体験の一つひとつ見落とさずに喜びとともに子どもたちに返してあげられたらと思っています。初めてのことからわくわくドキドキして楽しもう。そんな子どもたちの姿が願いです。」

キャンプクラフトも、このテーマとどのように関わるかを検討しながら実践することになる。幼児のキャンプクラフトでは、鋸での木の切断や、クリックドリルでの穴あけは、子どもたちにとり、ほとんど初めての道具体験であり、木を用いて遊び道具をつくり、それで遊ぶ体験も初めての子が多い。今回は、林間でのダイナミックな活動を意識して、ゴムチューブの反発力で弓矢を飛ばす「パチンコ弓矢」づくりを、幼稚園年長児と小学1年生を対象とした幼児キャンプと、小学4年生までを対象としたOBキャンプでのキャンプクラフトで計2回実践した。

(2) 活動の経過 (図1～図6)

2. 名古屋女子大学オープンカレッジ夏休み工作教室

「走る虫をつくろう」、名古屋女子大学オープンカレッジ事務局主催、平成14年8月8日、9日の午前の低学年、午後の高学年の2講座、名古屋女子大学天白学舎

(1) 活動の意義と概要

名古屋女子大学主催で、地域の子どもたちに開放された講座として今回で3回目のものづくりワークショップの実践となる。グループ編成は、約20名ずつ低学年(1～3年生)と高学年(2～5年生)に分ける予定であったが、実際には低学年の参加者が多く、高学年は少なかった



図1. 道具の使用法の説明

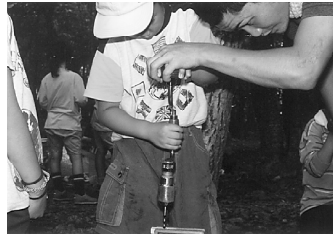


図2. クリックドリルで発射装置部品の穴あけ



図3. 発射装置の組み立て



図4. 弓矢用の木の切断



図5. 弓矢の先端部にプチプチビニールを巻く



図6. 完成・飛ばして遊ぶ

ため、低学年Aグループと、低学年と高学年が混ざったBグループの2グループとなった。内容は、ゴムチューブの反発力で、3匹の虫を疾走させる「走る虫をつくろう」をテーマとしたヒノキを使用したワークショップであり、1グループごとに、半日ずつ2日に分けて計6時間の実践を行った。

(2) 活動の経過 (図7～図12)



図7. 「虫」を走らせて導入



図8. つくりたい「虫」を絵に描く



図9. 発射装置部品の穴あけ



図10. 工夫して3匹の「虫」をつくる

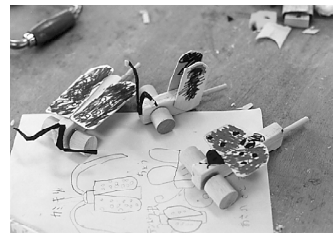


図11. 計画どおりの「虫」が完成



図12. つくった「虫」を走らせて遊ぶ

3. 文化フォーラム春日井でのワークショップ

『木で「走る虫」をつくろう!』、木のおもちゃの魅力展ワークショップ、平成14年8月21日、文化フォーラム春日井

(1) 活動の意義と概要

「文化フォーラム春日井」は、同パンフレット⁶⁾によると、春日井市に在る、図書館と文芸館からなる複合施設である。参加、体験、創造の拠点となる文芸館では、開放感溢れる交流アトリウム、独創的な展示空間を創出できるギャラリー、優れた映像と音響を楽しめる視聴覚ホールなどを配し、文化創造への様々な可能性のある施設となっている。「文化フォーラム春日井」は、学び、創造、発表、鑑賞の場として広く活用され、21世紀への文化の掛け橋となることを目指している。

筆者が計画したワークショップは、「文化フォーラム春日井」で行われた「木のおもちゃの魅力展—作家の思い そして夢—」(2002年8月1日～8月25日)という、6人の作家(渋谷寿、武知広幸、中井秀樹、ねもといさむ、樋口一成、三輪義信)の創作おもちゃや、日本、世界各地のおもちゃを展示する展覧会において、6人の作家が展覧会会期中に1回ずつワークショップを行うイベントとして行われたものである。筆者が担当したのは、2002年8月21日、14時から17時までで行った、『木で「走る虫」をつくろう!』という3時間のワークショップである。小学校低学年は、親子での参加が特色であり、先にも述べたが、最近の傾向として親子で参加したいというニーズに応えられる企画である。

(2) 活動の経過 (図13～図18)

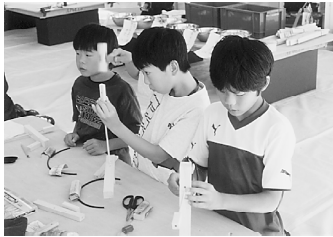


図13. 導入後、一斉に発射装置をつくる



図14. 「虫」の胴体を鋸で切断する



図15. カウンセラーの助言により親子でつくる

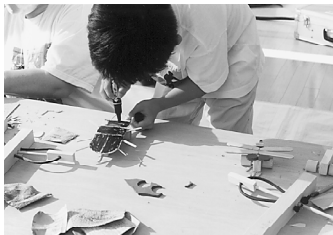


図16. 工夫して「虫」をつくる



図17. 個性的な「虫」が完成



図18. つくった「虫」を一斉に走らせて遊ぶ

キャンプクラフト及びワークショップアンケート分析

次に、平成14年度に実践した3つのものづくり活動における分析を行う。調査概要と調査結果を表1～3に示した。表中のグラフは、活動ごとのアンケート回答者の母数が全て異なる為、百分率ではなく実数で数値を示した。また、表1～3 調査項目のそれぞれの項目に関して、カウンセラーと参加者の具体的な記述調査も行ったが、今回は本論紙面の都合上割愛し、特出する記述内容のみ文面で記す。

今回は、昨年度の研究に引き続き、各活動の調査項目ごとに具体的な分析を行うことで、それぞれのものづくり活動の実態を把握し、新たな改善の為の提案を行いたい。

1. 山梨大学幼児野外教育研究会主催の野外教育におけるキャンプクラフト分析

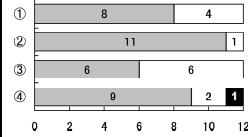
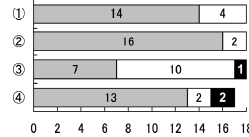
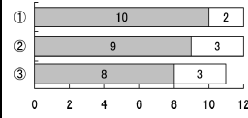
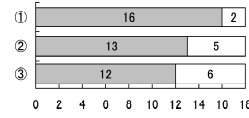
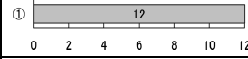
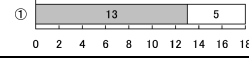
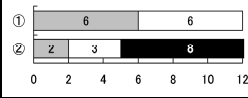
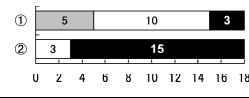
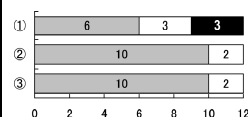
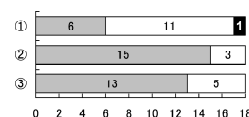
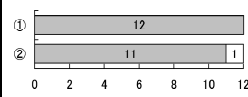
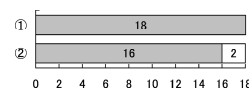
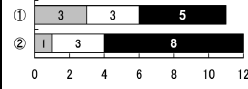
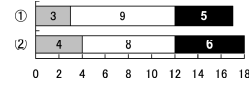
山梨大学幼児野外教育研究会主催の野外教育におけるキャンプクラフトのカウンセラーを対象とした調査概要と調査結果を表1に示した。幼児キャンプの参加者は年長児、OB キャンプの参加者は小学1年生から4年生である。以下、それぞれの活動を幼児、OB と記す。

表1-1に「テーマ・内容について」の調査項目と調査結果を示した。この項目に関しては、全体的に肯定的な傾向がみられ、「そう思わない」という否定的な意見は、③「作り方は子どもにとってやさしかった」かで1人と④「時間にゆとりがあった」かで3人みられるが、④の回答者のうち2人がクラフト初体験のカウンセラーであったことから、子どもにとってだけでなく、カウンセラー自身にも時間的な余裕がなかったのではないかと考えられる。

表1-2に「子どもの反応について」の調査項目と調査結果を示した。表1-2-①「活動を楽しんでいた」という設問に対して、カウンセラーの8割以上が「そう思う」と答えており、表1-2-②、③の子どもの集中度や自主性に関する質問についても、全体的に肯定的な評価が多かった。このように、クラフトに対する子ども達の反応は、例年同様、肯定的であることが理解できた。

表1-3に「子どもの道具使用について」の調査項目と調査結果を示した。表1-3-①「上手に使うことができた」という設問に対して、OB カウンセラーの全員が「そう思う」と回答している。過去3年間の「ものづくり教育の実践的研究」の調査結果⁷⁾において、OB カウンセ

表1. キャンプクラフト 調査結果

	山梨大学OB(小学生)キャンプクラフト	山梨大学幼児キャンプクラフト
製作物・テーマ	ばちんこ弓矢	ばちんこ弓矢
調査日	平成14年7月25日	平成14年7月30日
場所(環境)	本栖湖青少年スポーツセンター(野外)	本栖湖青少年スポーツセンター(野外)
回答者実数	12人	18人
調査項目	1. テーマ・内容について ①テーマが(キャンプ活動全体に則して)良かった。 ②子どもの興味・関心・意欲を高められたテーマ・内容だった。 ③作り方は子どもにとって易しかった。 ④時間にゆとりがあった。 	①テーマが(キャンプ活動全体に則して)良かった。 ②子どもの興味・関心・意欲を高められたテーマ・内容だった。 ③作り方は子どもにとって易しかった。 ④時間にゆとりがあった。 
	2. 子どもの反応について ①活動を楽しんでいた。 ②集中していた。 ③自主的に活動した。 	①活動を楽しんでいた。 ②集中していた。 ③自主的に活動した。 
	3. 子どもの道具使用について ①上手に使うことができた。 	①上手に使うことができた。 
	4. 子どもの工夫について ①子ども自身が作品を工夫していた。 ②拾ってきた自然素材を使った工夫があった。 	①子ども自身が作品を工夫していた。 ②拾ってきた自然素材を使った工夫があった。 
	5. カウンセラー自身の指導について ①作業の進め方(時間配分)に気を配った。 ②道具の使い方に気を配った。 ③言葉かけ等の指導法に気を配った。 	①作業の進め方(時間配分)に気を配った。 ②道具の使い方に気を配った。 ③言葉かけ等の指導法に気を配った。 
	6. マニュアルについて ①マニュアルは作業の上で役立った。 ②マニュアルは必要である。 	①マニュアルは作業の上で役立った。 ②マニュアルは必要である。 
	7. 環境教育について ①子どもが周りの環境に目を向けていた。 ②環境教育的な活動ができた。 	①子どもが周りの環境に目を向けていた。 ②環境教育的な活動ができた。 

調査項目1~3,5~7 そう思う どちらでもない そう思わない
 調査項目4 大変工夫していた 工夫していた 工夫していない

ラー全員が子ども達が道具を上手に使えていたと回答したのは、今回が初めてである。OB キャンプの参加者は、その殆どが幼児キャンプでクラフト活動を経験しており、のこぎりやクリックドリル等の道具を使ったことがある子どもが多いことが、このような結果につながったと思われる。幼児キャンプと OB キャンプという経験の積み重ねによって、子ども達は道具に関する技術を着実に身に付けていると考えられる。

表 1-4 に「子どもの工夫について」の調査項目と調査結果を示した。表 1-4-①「子ども自身が作品を工夫していた」という設問に対して、OB カウンセラーは「大変工夫していた」または「工夫していた」という肯定的な回答であるのに対し、幼児カウンセラーでは「工夫していない」という回答が、18人中 3人と否定的な意見が一部にみられた。「大変工夫していた」または「工夫していた」の具体的な記述としては、「色塗りをしていた」や「矢の羽の形を工夫した」という内容であった。また、表 1-4-②「拾ってきた自然素材を使った工夫があった」かでは、OB カウンセラー 12人中 8人が、幼児カウンセラー 18人中 15人が「工夫していない」と回答していた。自然素材を使って「大変工夫していた」や「工夫していた」に対する具体的な記述は、その殆どが「葉っぱをつけた」であり、「工夫していない」の具体的な記述は「自然素材を使う余地がなかった」や「(子どもへの) 呼び掛けが必要だった」であった。キャンプクラフトは限られた時間内の活動である為、周りの自然に目を向けて活動するというところまでは至らないことが多いが、「工夫していない」と回答したカウンセラーの記述のように、子ども達が自然を意識しながら活動できるような言葉がけを行うなどの姿勢を、指導者自身が持つことが、キャンプクラフトを自然の中での活動として展開して行く鍵になると考えられる。

表 1-5 に「カウンセラー自身の指導について」の調査項目と調査結果を示した。幼児、OB とも表 1-5-②「道具の使い方に気を配った」かに対し「そう思う」というカウンセラーの回答が多く、この傾向はこれまでのクラフトにも共通して言えることであり、カウンセラーは子どもの安全について配慮する傾向にあることを再確認した。また、表 1-5-③「言葉がけ等の指導法に気を配った」に「そう思う」と回答する OB カウンセラーの数は、②「道具の使い方に気を配った」と同数であり、また幼児カウンセラーにおいても「そう思う」の回答数が多いことから、カウンセラー達は子どもとコミュニケーションをとるという点においても配慮していることが理解できた。

表 1-6 に「マニュアルについて」の調査項目と調査結果を示した。表 1-6-①「マニュアルは作業の上で役立った」かに対し、OB・幼児カウンセラー全員が「そう思う」と回答しており、マニュアルが有効に使用されていることが理解できた。カウンセラー全員がこの設問に対し「そう思う」と答えたのは、過去 3年間の「ものづくり教育の実践的研究」の調査結果⁸⁾において今回が初めてであり、改めてマニュアルが有効に使用されていることを確認した。また表 6-1-②「マニュアルは必要である」かの設問に対する回答も、殆どが「そう思う」と回答しており、「そう思わない」という否定的な意見はみられなかったことから、マニュアルの必要性が高いことが理解できる。マニュアルの有効性や必要性に関しては、例年肯定的な傾向にあるため、今後もカウンセラーがクラフト実践に活かせる、実用的な内容の検討をする必要がある。また、カウンセラーがマニュアルの内容をこなすだけの活動に終らないよう、各自の方法でクラフト指導を展開できるきっかけや、参考になるマニュアルの検討を行いたい。

表 1-7 に「環境教育について」の調査項目と調査結果を示した。幼児・OB とも表 1-7-①「子どもが周りの環境に目をむけていた」か、②「環境教育的な活動ができた」という設問に対して「そう思わない」と回答するカウンセラーの割合が高い。昨年度の調査結果から、本来

の環境教育の意味を理解できていないカウンセラーがいることが分かり、彼らの環境教育に対する認識は年々希薄になっていることを確認した為、今年度の実践では、あらかじめカウンセラー達に環境教育の概要についての説明を行った。その結果、「環境教育」イコール「ゴミ問題」という記述は、殆どみられなくなったが、やはり、短時間の間で環境教育的な活動を行うまでには至らなかったようである。クラフト経験が5回以上あるカウンセラーは「自然の中で(活動を)行うことについて話した。」と記述していたが、これに対し経験回数の少ないカウンセラーからは、そのような記述がみられず、環境教育的な実践にまで至らなかったようである。しかし、「森の中のものを何か例えて(川など)自分達の空想のフィールドをつくり上げていった」など自然に思いを馳せるような働きかけをしているカウンセラーもみられ、このような自然への視点からも、環境教育的なクラフト活動が展開されると考える。

以上のキャンプクラフトの調査結果から、計画者の設定したテーマ・内容は、キャンプ活動に則したものであり、子ども達は経験の積み重ねによって道具使用などのものづくりの技術を身に付けており、楽しみながら自主的にクラフト活動を行っていることが理解できた。また、カウンセラー達にとって、マニュアルは指導上有効なものであるが、それに頼るのではなく、それを基礎に自分なりのクラフト活動に展開できる指導能力の育成について検討する必要があることを確認した。さらに、今後の課題としては、子ども達が自然環境を生かしたものづくりを展開できるようなクラフトの指導方法について考えることがあげられる。

2. 名古屋女子大学オープンカレッジ調査分析

表2に名古屋女子大学オープンカレッジの調査結果を示した。このオープンカレッジは、Aグループ小学校1年生11人、2年生9人、3年生2人の計22人、Bグループ小学校2年生6人、3年生7人、4年生5人、5年生5人の計23人の2つのグループで実践した。

表2-1に「テーマ・内容について」の調査項目と調査結果を示した。表2-1-①「やってみたいと思うテーマ・内容だった」という設問に対し、Bグループの約5割、Aグループの約6割が「そうおう」と回答しているが、残りの半数弱が「どちらでもない」「そう思わない」と回答している。「そうおもわない」と回答した6人のうち、活動を終えてからの表2-7-①「こんかいのようなものづくりをまたやりたいとおもいますか?」という設問に対し「そう思う」と回答したのは4人、「どちらでもない」は1人、「そうおもわない」は1人であった。このことから、はじめはやりたいと思っていた子どもでも活動を終えてからは「またやりたい」と感じていることが分かり、このものづくりに子ども達が意欲的に参加していたことが理解できた。しかし「やってみたいと思うテーマ・内容だった」ではなく、「またやりたい」と思わなかった子どもが1人みられ、この子どもの活動中の様子をカウンセラーに聞いたところ、「自分の思うように作品が作れず、また隣の子どもの作品が自分よりも上手なことに納得行かず、活動の最中ずっと泣いて癩癩をおこしていた。」という状況を確認した。また、この子どもは表2-2-①「たのしくものづくりができた」かに対しても「そうおもわない」と回答している。このことから、カウンセラーはこのような子どもの傾向を把握し、単にもものづくりの技術を教えるだけでなく、苦しさやそれを乗り越えた楽しさを伝えられるような力量が必要とされると考える。しかし、このような指導者としての資質はすぐに形成されるものではない。美術教育を通して子どもに何を与えることができるのかを常に考えながら、実践を積み重ねていくことは、計画者である筆者ら、また将来教員になるカウンセラーの学生達にとって大切な姿勢であると考えられる。このような参加者の傾向に対し、カウンセラー達の回答をみると、表2-

ものづくり教育の実践的研究 (IV)

表2. 名古屋女子大学オープンカレッジ

	名古屋女子大学オープンカレッジ夏休み 工作教室 (Aグループ)	名古屋女子大学オープンカレッジ夏休み 工作教室 (Bグループ)	名古屋女子大学オープンカレッジ夏休み工作教室 (カウンセラー)	
製作物・テーマ	「走る虫をつくらう！」(走る虫づくり・自由課題)	「走る虫をつくらう！」(走る虫づくり・自由課題)	「走る虫をつくらう！」(走る虫づくり・自由課題)	
調査日	平成14年8月9日	平成14年8月9日	平成14年8月9日	
場所(環境)	名古屋女子大学天白学会(屋内)	名古屋女子大学天白学会(屋内)	名古屋女子大学天白学会(屋内)	
回答者実数	22人	23人	7人	
調査項目	1. テーマ・内容について	① やってみたいとおもうテーマ・内容だった。 ② つくりかたはやさしかった。 ③ じかにゆとりがあった。 	① やってみたいとおもうテーマ・内容だった。 ② つくりかたはやさしかった。 ③ じかにゆとりがあった。 	① テーマが良かった。 ② 子どもの興味・関心・意欲を高められたテーマ・内容だった。 ③ 作り方は子どもにとって易しかった。
	2. 反応について	① たのしくものづくりができた。 ② つくることにしゅうちゅうできた。 ③ じぶんからすすんでかつどうできた。 	① たのしくものづくりができた。 ② つくることにしゅうちゅうできた。 ③ じぶんからすすんでかつどうできた。 	① 活動を楽しんでいた。 ② 集中していた。 ③ 自主的に活動した。
	3. 道具使用について	① どうくをじょうずにつかうことができた。 	① どうくをじょうずにつかうことができた。 	① 上手に使うことができた。
	4. 工夫について	① さくひんをくふうしてつくった。 	① さくひんをくふうしてつくった。 	① 子ども自身が作品を工夫していた。
	5. ものづくり経験について	① いままでこんなものづくりをしたことがありますか? 	① いままでこんなものづくりをしたことがありますか? 	8. カウンセラー自身の指導について ① 作業の進め方(時間配分)に気を配った。 ② 道具の使い方に気を配った。 ③ 言葉かけ等の指導法に気を配った。
	6. 昨年の参加状況	① きょねんのこうさくきょうしつに、さんかしましたか? 	① きょねんのこうさくきょうしつに、さんかしましたか? 	9. マニュアルについて ① マニュアルは作業の上で役立った。 ② マニュアルは必要である。
	7. ワークショップの評価と参加意志について	① こんかひのようなものづくりを、またやりたいとおもいますか? 	① こんかひのようなものづくりを、またやりたいとおもいますか? 	

調査項目1~3, 7~9 そう思う どちらでもない そう思わない
 調査項目4 たくさんくふうした(大変工夫していた) すこしくふうした(工夫していた) くふうしなかった(工夫していない)
 調査項目5 ある ない
 調査項目6 はい いいえ

※調査項目4回答例の()内はカウンセラーの回答内容

1-①「テーマが良かった」か、表2-1-②「子どもの興味・関心・意欲を高められたテーマ・内容だった」という設問に対して、全員が「そう思う」と答えるという肯定的な傾向がみられる。また、表2-1-③「作り方は子どもにとって易しかった」という設問に関しても、「そう思わない」という回答はなく、この点に関しても子どもの回答に比べ、カウンセラーの回答には肯定的な傾向がみられ、全体的にカウンセラー達はクラフトのテーマや内容を肯定的に捉えていることが分かった。

表2-2に参加者の「反応について」の調査項目と調査結果を示した。表2-2-①「たのしくものづくりができた」かに対して、殆どの子どもが「そうおもう」と答えている。また、表2-

2-②「つくることにしゅうちゅうできた」か③「じぶんからすすんでかつどうできた」かという設問に対しても半数以上の子どもが「そうおもう」と回答している。これらの結果から、殆どの子ども達はものづくりを楽しみ、作ることに集中していることが理解できた。そして、カウンセラーの調査結果には、表2-2-①～③の3つの設問に対する回答に「そう思わない」という否定的傾向はなく、参加者の反応においても、子どもの意見に比べてカウンセラーの意見は肯定的であることが確認できた。

表2-3に参加者の「道具使用について」の調査項目と調査結果を示した。表2-3-①「どうぐをじょうずにつかうことができた」という設問に対して、「そうおもわない」という回答はどちらのグループにもみられず、約7割の参加者が「そうおもう」と回答していることから、殆どの子どもは道具を上手に使えていたことが分かる。これに対しカウンセラー達の捉え方は、「そう思う」の割合が子どもよりも若干少ない。カウンセラーの記述の中には「後半、慣れてくると道具の使い方が雑になってきて、ひやっとする場面もあった。」という意見もみられ、慣れに対する危険性を示唆する者もいた。これまでのものづくりの実践の中からも、道具を使ったことがあるという子ども程、道具の危険性に対する意識が希薄で、危ない使い方をする傾向がみられた。正しい使い方をすれば安全な道具も、使い方を間違えると非常に危険なものになるということ子ども達に的確に認識させる為には、活動前の明確な説明と、カウンセラーの細やかな指導が必要であると考えられる。

表2-4に参加者の「工夫について」の調査項目と調査結果を示した。表2-4-①「さくひんをくふうしてつくった」かに対する調査結果の傾向をみると、Aグループに比べBグループの方が「くふうしなかった」の回答が多くみられた。これは以前のキャンプクラフトの調査結果にもみられた傾向であるが、どちらかという学年が低い方が枠に縛られない自由な発想をしているということが理由であると考えられる。また、殆どの子どもは「たくさんくふうした」または「すこしくふうした」と答えており、作品に対しそれぞれ工夫をしていることが分かり、具体的な記述をみると「虫の羽の形を工夫した」「虫の羽の色をぬった」などの内容が多く、計画者が設定していた工夫できる部分に関する工夫が多かったことが分かった。これに対し、表2-4-①のカウンセラーの調査結果からは、子ども達が工夫していなかったという回答がみられず、この結果からも、子どもの実体とカウンセラーの子どもへの認識との間に微妙なずれがあることが明らかになった。

表2-5「いままでにこのようなものづくりをしたことがありますか？」に対する回答にAグループ22人中9人、Bグループ23人中12人の子どもが「はい」と回答しており、Bグループでは、半数以上の子どもが、このようなものづくり経験をしていることが分かった。具体的にどのようなところでこのような体験をしたかに関する記述をみると、「造形教室」「幼稚園」「学校」「(名古屋女子大学の)工作教室」「家」「生涯学習センター」など様々であった。近年では美術館・博物館などの地域の施設でも、ものづくりに関する様々なワークショップが広がってきているが、この回答からもそのことが理解できる。また、表2-5で「はい」と答えた12人のうち5人が昨年のオープンカレッジの経験者であり、オープンカレッジを通したのものづくり経験の積み重ねも期待できるだろう。

表2-8に「カウンセラー自身の指導について」、表2-9に「マニュアルについて」の調査結果を示した。キャンプクラフトの調査結果同様、多くの学生カウンセラー達は指導に関しては、まず道具使用、次に言葉がけについて配慮しており、作業の進め方に関しては殆どのカウンセラーがあまり配慮していないことが理解できた。また、マニュアルに関しても、カウンセラー

全員が有効に使い、また必要としていることが分かった。

以上の結果から、子ども達も活動を楽しんで行き、Bグループの参加者のうち、ものづくり活動の経験者のおよそ半数はオープンカレッジの経験者であることが分かった。また昨年度の調査結果⁹⁾同様、全体的に子ども達よりもカウンセラー達の方が活動を肯定的に捉えていることも理解できた。今回のオープンカレッジでは、危険な行為をする等動向に問題のある子どもは特にみられなかったが、自分の思い通りにものづくりができず葛藤する子どもに対して、その苦しさを乗り越えることで、ものづくりの楽しさを味わえるような関わりについて検討する必要性が明らかとなった。また、活動に対する自由記述の中には「つぎはこんなことがしたい」「こんなものを付けたい」という創作の発想や展開がいくつかみられ、「図工が楽しくなった」などの喜びの声も上げられていた。今後も、このような子どもの主体的な創作意欲を導き出すようなものづくりの検討を行っていきたい。

3. 文化フォーラム春日井主催のワークショップ調査分析

表3に文化フォーラム春日井主催のワークショップの調査結果を示した。このワークショップは、前述した「木のおもちゃの魅力展—作家の思いそして夢—」の出演作家達による、ものづくりワークショップの中の渋谷担当のものである。

表3-1に「テーマ・内容について」の調査項目と調査結果を示した。参加者、カウンセラー共に、全体的に肯定的な傾向にあるが、各項目とも「そうおもわない」という回答が若干みられた。特に、表3-1-③「じかんにゆとりがあったか」という参加者に対する設問に対して、「そうおもわない」と答えた者は26人中6人と、約2割の参加者が時間的に余裕がなかったと感じていることが理解できる。この2割の回答者の内訳は1年生から6年生までと幅広く、年齢による差異はなかった。また、オープンカレッジ同様、これら参加者の傾向に対し、カウンセラーの回答の傾向は比較的肯定的であることが表3-1から理解できる。

表3-2に「反応について」の調査項目と調査結果を示した。表3-2-①「たのしくものづくりができた」という設問に対して、全員の子どもが「そうおう」と回答している。また、表3-2-②「つくることにしゅうちゅうできた」か、表3-2-③「じぶんからすすんでかつどうできた」という設問に対して、「そうおう」という回答が半数以上みられることから、今回のワークショップにおいて、殆どの子どもが楽しんでものづくり活動をしていることが理解できた。しかし、表3-2-③「自主的に活動していた」かに対するカウンセラーの記述には、「そう思わない」という回答が1人みられ、その具体的な記述は「親のアドバイスや手助けが多く、子どもらしさがないと感じた。」という内容であった。また、このカウンセラーは自由記述の欄にも「親の育て方で、子どもらしい作品が作れる子と、作れない子とに分かれてしまっていて、1人ひとりにコメントしにくかった。今回は親との触れ合いが目的なのか、子どもの発想を育てるのが目的なのか、心から知りたいと感じました。」と記しており、他のカウンセラーも「親が参加している所は、親がほとんどやっているという場面もみられたので、もっと子ども自身が作業できたら良かったなと思った」と記していた。実際に、子供達の回答にも、表3-2-③「じぶんからすすんでかつどうできた」かに対し「そうおもわない」という回答が26人中2人みられ、自主的な活動ができなかった子どもが、少しではあるが確認された。筆者らが、行ってきたワークショップは、カウンセラーの人数が少ない場合、基本的に幼児や低学年の子どもは親と一緒に参加することを原則にしているが、活動の内容や方法によっては子ども達にとって、親と共に活動することが必ずしも良いとは限らないことが今回の結果から理解できた。

ものづくり活動は、あくまでも子どもの自由な発想を引出すことが重要であり、その上で親との触れ合いの機会をつくることは大切であるが、子どもの創造性を打ち消してしまうような親の関わりは、ものづくり活動の可能性を狭めてしまう結果にもなりかねない。今後は、このような点をふまえ、あらかじめ活動の目的を親に説明する等の配慮が必要であろう。また、このような問題は我々のワークショップだけでなく、美術館や博物館等の地域の施設が行っているものづくりワークショップにとっても同様の課題であり、各機関の主催者、学芸員の方達も検討している事柄であることを聞き取り調査¹⁰⁾によって確認した。1999年から土を使ったワークショップを行っている愛知県陶磁資料館では、何回かのワークショップの積み重ねの中で、あらかじめ親と子別々のプログラムをたて、親は親、子どもは子どもで楽しめるような活動を展開しているとのことである¹¹⁾。このような形をとることにより、子どもは親の、親は子どもの作品から刺激を受けながら製作を行い、どちらも楽しめる活動へと展開することが出来た様である。今後は、このような視点も含めながら、親と子の関係にも考慮できるワークショップを目指す必要がある。

表3-3に「道具使用について」の調査項目と調査結果を示した。表3-3-①「どうぐをじょうずにつかうことができた」という設問に対する参加者の回答は、「そうおもう」の回答が半数以上あり、「そうおもわない」という回答がみられなかった。また、これに対するカウンセラーの記述も、全員が道具を上手に使うことができたと思っていることから、道具使用に関す

表3. 文化フォーラム春日井でのワークショップ

	文化フォーラム春日井ワークショップ(参加者)	文化フォーラム春日井ワークショップ(カウンセラー)
製作物・テーマ	木で「走る虫」をつくらう!	木で「走る虫」をつくらう!
調査日	平成14年8月21日	平成14年8月21日
場所(環境)	文化フォーラム春日井(屋内)	文化フォーラム春日井(屋内)
回答者実数	26人	6人
調査項目	<p>1. テーマ・内容について</p> <p>① やってみたいとおもうテーマ・ないようだった。 ② つくりかたはやさしかった。 ③ じかにゆとりがあった。</p> <p>① 19 4 3 ② 13 7 5 ③ 11 8 6</p> <p>0 5 10 15 20 25</p>	<p>① テーマが良かった。 ② 子どもの興味・関心・意欲を高められたテーマ・内容だった。 ③ 作り方は子どもにとって易しかった。</p> <p>① 5 1 ② 5 1 ③ 1 4 1</p> <p>0 1 2 3 4 5 6</p>
	<p>2. 反応について</p> <p>① たのしくものづくりができた。 ② つくることにしゅうちゅうできた。 ③ じぶんからすすんでかつどうできた。</p> <p>① 24 2 ② 19 6 1 ③ 10 8 2</p> <p>0 5 10 15 20 25</p>	<p>① 活動を楽しんでいた。 ② 集中していた。 ③ 自主的に活動した。</p> <p>① 6 ② 5 1 ③ 4 1 1</p> <p>0 1 2 3 4 5 6</p>
	<p>3. 道具使用について</p> <p>① どうぐをじょうずにつかうことができた。</p> <p>① 16 10</p> <p>0 5 10 15 20 25</p>	<p>① 上手に使うことができた。</p> <p>① 6</p> <p>0 1 2 3 4 5 6</p>
	<p>4. 工夫について</p> <p>① さくひんをくふうしてつくった。</p> <p>① 12 10 4</p> <p>0 5 10 15 20 25</p>	<p>① 子ども自身が作品を工夫していた。</p> <p>① 3 3</p> <p>0 1 2 3 4 5 6</p>
	<p>5. ものづくり経験について</p> <p>① いままでにこのようなものづくりをしたことがありますか?</p> <p>① 14 11</p> <p>0 5 10 15 20 25</p>	<p>7. カウンセラー自身の指導について</p> <p>① 作業の進め方(時間配分)に気を配った。 ② 道具の使い方に気を配った。 ③ 言葉かけ等の指導法に気を配った。</p> <p>① 1 5 ② 4 2 ③ 3 2 1</p> <p>0 1 2 3 4 5 6</p>
	<p>6. ワークショップの評価と参加意志について</p> <p>① ごんかいのようなものづくりを、またやりたいとおもいますか?</p> <p>① 23 2 1</p> <p>0 5 10 15 20 25</p>	<p>8. マニュアルについて</p> <p>① マニュアルは作業の上で役立った。 ② マニュアルは必要である。</p> <p>① 4 1 1 ② 5 1</p> <p>0 1 2 3 4 5 6</p>

調査項目1~3, 6~8 □ そう思う □ どちらでもない ■ そう思わない
 調査項目4 □ たくさんくふうした □ すこしくふうした ■ くふうしなかった
 (大変工夫していた) (工夫していた)
 調査項目5 □ ある ■ ない
 ※調査項目4回答例の()内はカウンセラーの回答内容

る大きな問題はなかったと言えるだろう。

表3-4「工夫について」の調査項目と調査結果を示した。表3-4-①「さくひんをくふうしてつくった」という設問に対し、「たくさんくふうした」または「すこしくふうした」と回答したものは26人中22人であり、カウンセラーの記述においても、全員が「大変工夫していた」または「工夫していた」と回答しており、殆どの参加者は作品に何らかの工夫をすることができたと言える。しかし、「くふうしなかった」と答えた4人の参加者に対しては、工夫でききっかけを与えられるような、カウンセラーの働きかけも必要であり、カウンセラーがそこに気付くことも大切であると考えられる。

表3-5に「ものづくり経験について」の調査項目と調査結果を示した。表3-5「いままでにこのようなものづくりをしたことがありますか？」に対して「ある」と回答した子どもは、25人中14人であり参加者の半数以上がワークショップの経験者であることが分かった。その具体的内容としては「公民館」「小学校」「幼稚園」「カルチャーセンター」「文化フォーラム春日井」であったが、うち約半数が「文化フォーラム春日井」の他のワークショップであった。「木のおもちゃの魅力展」の出展作家によるワークショップは、期間中に計6回実施されたが、この結果から展覧会活動は、地域子ども達にとって、いろいろなパターンのものづくりの楽しみを提供したと考えられる。

表3-6「こんかいのようなものづくりを、またやりたいとおもいますか？」に対しては、26人中23人は「そうおもう」と回答しているが、2人は「どちらでもない」1人は「そうおもわない」と回答している。殆どの子ども達にとっては「つくりたい」という創作意欲を高める活動であったと判断できるが、そう思わなかった子ども達の理由を、カウンセラーの聞き取りなどから具体的に検討していくことも必要であると考えられる。

また、「文化フォーラム春日井」主催のアンケートによる参加者の感想は以下のようであった。「飾りつけは自由だったのでおもしろかった。8才女」、「手順が分かりやすくて3匹目もてぎわよくつくれた。11才男」、「道具を使いながら工作できて楽しかった。41才女」、「3時間は長いと思っていたがあっという間であった。指導員の方も親切だった。35才女」、「自分で虫を飛ばせるのが楽しかったようだ。今回は親子共々楽しめ、ぜひ参加したいものだった。34才女」、「小1の子どもなので心配だったが楽しくできてよかった。女」、「楽しかった。11才男」、「楽しかった。もう一回やりたい。9才男」、「息子は作ることも虫も好きなのでとても楽しかった。7才男」、「作るのが楽しかった。8才男」、「色を塗ったり、作ったり楽しかった。10才男」、「自分一人で動くものを作ったことがないので、今回は楽しかったようだ。34才女」

楽しかったというものが多く、母親の意識で子どもとともに作れて良かったことが上げられている。

以上の調査結果から、殆どの子ども達は今回のワークショップでのものづくりを楽しんでおり、限られた時間の枠内での活動でも道具を使えるようになることを確認した。今後の課題としては、子どもの創造性を引出すために、ワークショップでの親との関わり方について検討する必要性があげられる。

結 語

今年度の「山梨大学幼児野外教育研究会主催の野外教育におけるキャンプクラフト」、「名古屋女子大学オープンカレッジ夏休み工作教室」実践におけるアンケートでは、テーマ・内容の

是非、道具使用の状況、マニュアルの必要性、子どもの取り組み姿勢等に関して子ども・カウンセラーの回答共に、ほぼ例年通りの肯定的な結果が得られた。テーマを設定し、教材化する部分と子どもが自由に創造できる部分を分けて設定するというワークショップの形は、子どもを対象とする、短時間で完結するワークショップにおける望ましい形態の一つであると考えられる。しかし、今回、ワークショップのテーマとした、発射装置の構造上の問題が明らかとなった。それは、ゴムの反発力で虫や、弓矢を発射する発射装置のスライドする丸棒と、前後に接着するヒノキのブロックが、発射時の衝撃によりはずれやすいという点である。この問題は、昨年度と比較して今年度は、ある程度改善したが完全ではなく、更に接合強度を上げる為にピン接合を行う等の改良が必要である。

一方、ワークショップの指導面において、「文化フォーラム春日井でのワークショップ」のような、親子（低学年）での参加の場合、その主催者側の意図は、指導者や指導補助者数の関係から、安全管理の上にも親に参加してもらう方がトラブルの防止になるという要素が大きい。確かに、指導者が少なくても安全に作業が行えるという利点があることとともに、親と子どもの交流が図れるという良い面はあるものの、逆に、子どもの自由な創造行為を伸ばそうという筆者らの意図に反し、親が子どものやるべき部分をやってしまうという問題が明らかになった。親子で参加したいという最近のニーズと、それに応えようとする美術館等でのワークショップにおける一つの課題であるが、今後、筆者らが計画する親子で参加するワークショップにおいては、筆者らの、子どもの主体的な関わりを重視するというワークショップの意向を参加する親に説明しておく等の対処を考えたい。

注

- 1) 拙稿「ものづくり教育の実践的研究(Ⅲ)ーワークショップ展開の視点からー」名古屋女子大学紀要第48号、人文・社会編、2002.
- 2) 前掲書1)、pp. 153-154.
- 3) 朝日新聞「親子でどうぞ美術館」2002.9.29.
- 4) 小学校学習指導要領解説図画工作編、p. 25、文部省、日本文教出版、1999.
- 5) 「親子でびじゅつかん」<http://www.artsforalljapan.org/>
- 6) 「文化フォーラム春日井 Kasugai City Library, Culture and Art Center」春日井市発行パンフレット
- 7) 前掲書1)
拙稿「ものづくり教育の実践的研究(Ⅰ)ー学校外教育の視点からー」名古屋女子大学紀要第46号、人文・社会編、2000.
拙稿「ものづくり教育の実践的研究(Ⅱ)ー異なるコンセプトによるワークショップ展開ー」名古屋女子大学紀要第47号、人文・社会編、2001.
- 8) 前掲書7)
- 9) 前掲書1) pp. 158-160.
- 10) 愛知県博物館協会第12回子どもと博物館研究会(平成14年10月19日)での報告より。
- 11) 愛知県陶磁資料館で1999-2001年に行われたワークショップ「こどもびじゅつかん やきものはっけんでん」に関する学芸員・佐藤一信氏の報告より。